

生命機能研究科

I	研究水準	研究 15-2
II	質の向上度	研究 15-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、発表された論文数は教員数から考えると高い水準にある。研究資金の獲得状況については、平成 16 年度以降に新規に獲得した主な大型外部資金は、例えば、科学技術振興調整費が 1 件、戦略的創造研究推進費が 7 件となっている。また、グローバル COE プログラムの研究拠点に採択され、高い水準の研究を展開している。民間からの受託研究も活発に実施していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、生命機能研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、生命機能研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、生体システム動作の統合的解明を目指して、工学、物理学から理学、医学に至るまでの異分野融合によって多様に研究が展開されている。発表された研究論文のうち、国際的に有力なジャーナルに掲載されたものが多く、例えば、脳における神経細胞の多様化分子機構の研究、1 分子レベルでの細胞内輸送機構等の研究、DNA 複製に関する研究があり、極めて質の高い水準にある。社会、経済、文化面

では、国際学会での発表が活発に行われていることなどは、優れた成果である。

以上の点について、生命機能研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、生命機能研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「相応に改善、向上している」と判断された事例が 3 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。